

【表現学関連分野の研究動向】

英語学

住吉 誠

アメリカのメリアム＝ウェブスター社は they を 2019年の単語 (word of the year) に選んだ。近年のノンバイナリー (non-binary) の考え方を受け、そのような性自認を持つ人を指す単数代名詞の they の使用が増加したためである。メリアム＝ウェブスター社のホームページ上で検索できる辞書の they の項にはこの用法が掲載されている。また、同オンライン辞書には Mr./Ms. に代わるノンバイナリーの Mx. という敬称も追加された。Collins COBUILD English Usage 第4版 (2019) では、第3版 (2011) にはないノンバイナリーの they の説明が Andy has invited us to their party. 等の例と共に追加された (p. 247) (この their は Andy's のこと)。このような変化は、言語外的要因が英語の代名詞の体系に影響を与え始めたことを示す。同時に、規範の捉え方や文法的変異形をどう考えるべきかについて大きな示唆を与える。

近年、英語の規範事項を再調査する動きや規範文法を学術的に捉え直す潮流が見られる。I. Tiekens-Boon van Ostade, *Describing Prescriptivism* (2019, Routledge) は、規範文法の成立、英語語法書の歴史、規範事項に対する人々の意識変化などを捉え直した意欲的な書である。英語語法書に書かれている内容は自らの思想をどのような英語でどう表現すればよいかという問題の裏返しでもある。記述言語学の隆盛の一方で、出版される規範的語法書の数は増え続けている。

表現法がそのまま言語使用者の社会的バックグラウンドまでも判断される材料になる現状を考えれば、記述的な態度であるがままの言語表現を認めれば認めるほど、一般の言語使用者は「唯一の正解」を求めるといった皮肉な状況が生まれる。どのようなアプローチで言語表現に迫るにせよ、本書は言語使用者と言語表現の関係を考え直す上で有益な一冊となる。

英語の表現を考える際、文法的変異 (grammatical variation) は重要な意味を持つ。B. Aarts et al., *The Oxford Handbook of English Grammar* (2019, Oxford Univ. Press) は、英文法に関する研究の鳥瞰図的な情報を得ることのできる優れた書である。言語表現と関係するのは Part V 文法変異と変化である。

話し言葉、書き言葉といったジャンルが使用される表現方法と相関関係を持ち、ジャンル特有の文法を作っていくという議論は表現論の観点から興味深く、これまでの研究動向を概観できるという点で有益である (第30章)。また、言語表現との兼ね合いで興味深いのは文学作品の中に現れた文法的変異をまとめた第31章である。文学作品に使用される言語は、近年「民主化」の傾向が見られる。標準英語だけではなく、地域方言・社会方言も使用しながら作品を紡ぐ。文学作品をそのような言葉遣いで書くというのは、標準英語が確立してきた権威への挑戦であり、非標準的言語で書き手が思考をどのように表現するかという試みでもある。そのような非標準的変異形が文学作品にどのような効果を与えるかを学ぶことは表現論の観点から重要であろう。

(関西学院大学)